

## 増上寺徳川家霊廟の風景（４）

### 台徳院御霊屋前の風景

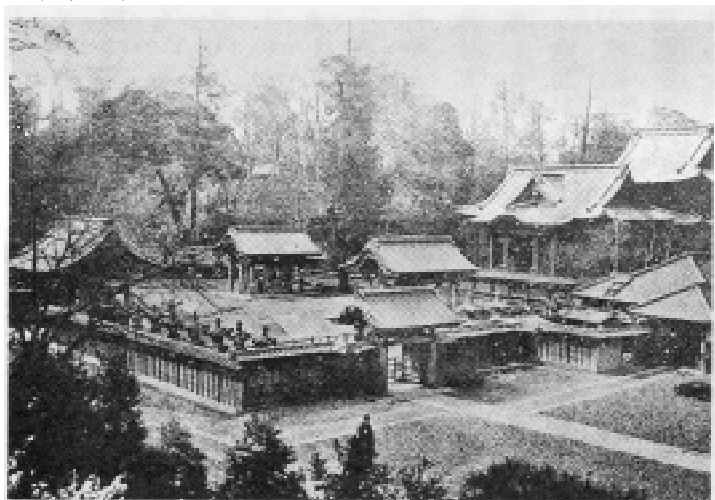


写真1 三田村鳶魚全集『芝・上野と銀座』掲載写真から

台徳院御霊屋の風景を見る際にどうしても紹介してみたい1枚の写真があった。御霊屋を右上方から俯瞰したもので、グランドレベルから撮られた写真が多い中で極めて異質な1枚の絵と言える。

この写真は三田村鳶魚翁の『芝・上野と銀座』の中に紹介されている物で、当初から増上寺のどの位置から撮られたものなのか興味を持っていた。

最初は三解脱門の楼上からならばこういう写真が撮れるのではないかと考えてみたが、最近になって神保町の本屋で増上寺発行の『縁山蹟芳』と題された5枚組の絵葉書にある「増上寺全景」という写真を見て、これこそが三解脱門の楼上からの写真であろうと考えるようになった。

『縁山蹟芳』には解説文が付されていて、その文面から大正末年に発行された事が判る。

三田村鳶魚の『芝・上野と銀座』のうち「芝のお寺」は大正十三年に読売新聞に発表され、大正十四年に春陽堂から刊行されているから、写真がその時からの所収であれば、ほぼ同時期に撮られた物と云うことになる。

絵葉書の左後方に見えるのが台徳院御霊屋だが、その前に経蔵の屋根が聳えていて、望遠レンズを使っても、写真1の映像を撮ることは不可能と思われる。

写真3は『国宝建造物』に有る写真だが、これも少し高い位置から撮られていて、写真左下に瓦屋根が連なっているのが見える。

崇源院前の写真は写真4の角度から撮られたものが多く残されているが、写真3と重ね合わせると石灯籠の配置も含めて空間的な広がり良く見て取れる。



写真2 『縁山蹟芳』の絵葉書から(筆者蔵)



写真3 『国宝建造物』から



写真4 『古写真から見る江戸から東京へ』から

改めて台徳院、崇源院前の位置関係を確認してみたい。台徳院御霊屋と崇源院霊牌所は軒を並べるように建ち並んでいる。崇源院は言うまでもなく2代将軍徳川秀忠の御台所。浅井長政と織田信長の妹お市の方との間に生まれた三人の姉妹の三女。長女は淀君、次女は京極高次に嫁した。寛永3年(1626年)9月15日、秀忠に先立って死去、享年54歳。麻布野で火葬に付されたとの記録が残っている。

崇源院は増上寺に葬られ、宏壮な霊牌所が営まれたが秀忠の死去に伴い新たな霊廟が造営されるのに伴って作り替えられたと言われている。現に旧霊牌所は鎌倉五山の一つ建長寺の仏殿として移築され現在に至つ

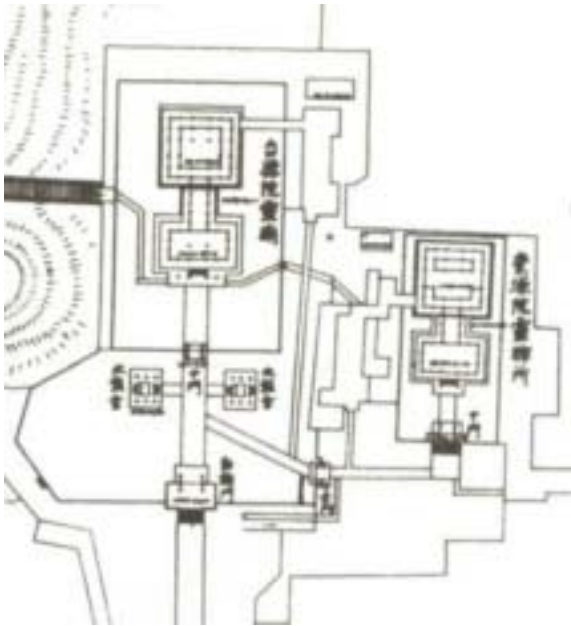


図1 芝増上寺南廟配置図『徳川家霊廟』より



写真5 『F. ベアト幕末日本写真集』より



写真6 大正2年に購入された彩色絵葉書(筆者蔵)

て居るが、そのことは稿を改めてお伝えしたい。

次に2枚の写真を比べてご覧頂きたい。ほぼ同じ位置から撮られたものだが、写真5は『F. ベアト幕末日本写真集』のもの、写真6は大正2年に購入された彩色絵葉書だが幾つかの違いが見て取れる。

中門前に並べられた唐金灯籠が写真6では全く無くなっているのが判る。

この唐金灯籠について香取秀真は大正三年に出した『日本鑄工史稿』の中の「江戸鑄物師の話」に

「其後芝へ行って二代將軍廟の邊を彼方此方捜して見ると、大分石の土臺が残って居りますが、其土臺の上に確かに金燈籠が載って居つた形跡がございます。増上寺に就て聞くと、泥坊に取られて仕方が無いから物置に入れて了つたという事であります。物置へ行って見ると、丁度太い丸太を積んだやうに井桁に組んで、天井裏へ届く程沢山の胴筒が積んである。笠は笠、臺は臺で積んである。少なく見積もっても二十本位は藏つてあります。」

と書いている。其の後この灯籠がどうなったかは明確でないが、最終的には戦災によって失われてしまったものと思われる。

千秋文庫所蔵の『享保年間による彩色大絵図』によれば中門前の唐金灯籠は中門左側は中央から

島津家久

佐竹義宣

藤堂大学助高次

中門右側は中央から

伊達遠江守秀宗

上杉弾正少弼定勝

浅野但馬守長晟

の各2基づつということが判っている。

写真1の俯瞰写真でも中門前の唐金灯籠は失われていて、おそらく見学者の為と思われる木の柵がぐるりと巡らせてあるのが見て取れる。

台徳院御霊屋前の風景で特徴的なのが写真中央の水盤舎である。中門への参道を夾んで左右1対

の水盤舎が設けられていた。

水盤舎に関しては田辺泰の『徳川家霊廟』の中に次の記述が有るので引いておく

「水盤舎は勅額門の内側で左右に相對して二棟存するが、その規模・意匠共に全然同様である。桁行三間、梁間二間、単層屋根切妻造、銅板葺、そして各正面及び背面は同様の取扱とされ、中央柱間には三級の石段を設け、中央部に石製水盤を設置している。

柱は十柱共に方形の一本石とされ、隅面は所謂几帳面とされ、下部は石敷の上に直接立ち、上部には僅かに粽を附し、金欄卷が彩画されている。そして頭貫・台輪の制があり、この頭貫・台輪から以上は木造である。頭貫には菊水の透彫を貼り、木鼻も亦菊水の籠彫とされ、台輪の端及び柱上部には金具が打つてある。

斗拱は花肱木の三斗を組、実肱木によって桁を受けている。

側面は斗拱にて紅梁を受け、中央に大瓶束を立てている。尚側面で屋根の唐破風は特殊な意匠にして、破風板の下端には一種雲形とも見らるる絵様を繰り、全面に十五の葵の紋章を附している天井は化粧屋根裏とされ、水盤は一本石を削って作られ、その大きさ九尺二寸と四尺五分、尚頭貫・台輪以上の木部は総べて極彩色の装飾施し、極は朱塗にして金具を打ち全体の意匠荘重である。寸尺は桁行十七尺八寸五分、梁間十二尺、この種水盤舎に石柱を立てることは、江戸時代初期の一流行とも見るべく、日光東照宮、同大猷院等にも、石柱の水盤舎がある。」

引用が長くなったが内部の彩色の様子など今では伝わらない部分も多いので略することをしなかった。

前にも紹介したが『増上寺日鑑第1巻』「役所日鑑」安永4年3月10日の条の増上寺からの書き出しの中には



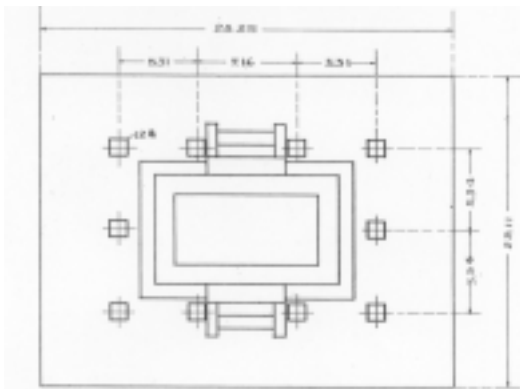


図2 『東京府史蹟保存物調査報告書』第11冊より



写真7 『東京府史蹟保存物調査報告書』第11冊より



写真8 『幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』

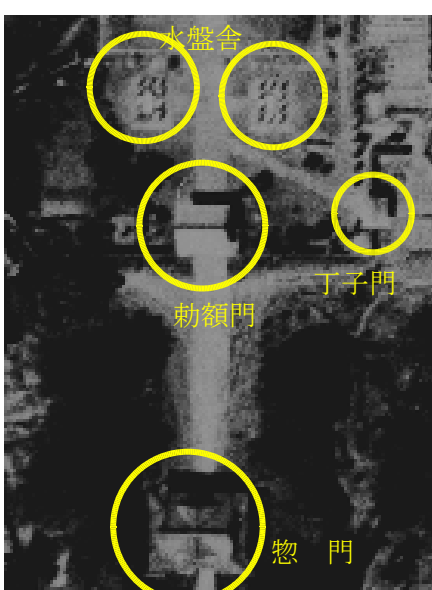


写真9 米軍撮影航空写真(昭和22年)

- 一、台徳院様御霊屋 御水屋 壺ヶ所  
右寛永九年鍋嶋肥前守殿献備、
- 一、御同所 御水屋 壺ヶ所  
右寛永九年寺沢志摩守殿献備、但当時断絶ニ付、従公儀御修復

と有る様に中門に向かって左側が寺沢志摩守廣高、右側が鍋嶋肥前守勝茂の寄進になるものである。

唐津藩(12万3千石)主寺沢志摩守広高の没後、寛永14年(1637)、キリシタン弾圧と農民に対する苛政に一揆が蜂起して島原の一揆勢に合流、島原の乱となる。翌年、堅高は天草領の4万石を没収され、正保4年(1647)に発狂して自刃、嗣子無く絶家となった。

「但当時断絶ニ付、従公儀御修復」という但し書きは、寄進された物は各大家で管理修繕することを示しており、絶家した場合には幕府が費用を負担して修復していたことが判る。この原則は石灯籠にも同じく適用されていた様だ。

写真8は『長崎大学付属図書館 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース』の目録番号151の「芝増上寺文昭院霊廟水盤舎」と題された写真だが、台徳院御霊屋前の2つの水盤舎を写しだした物で勿論「文昭院霊廟前」ではない。唐金灯籠が綺麗に並んで写っている。

改めて昭和22年に米軍が撮影した航空写真を見てみよう。

写真の下方から焼け残った惣門、勅額門が見え勅額門の右手には丁子門が見える。中門は焼失しているが、左右の水盤舎の石柱が10本ずつ黒々と影を引いて立ち並んでいるのが判る。

写真を見る限り、台徳院霊廟は勅額門、丁子門を残して中庭、中門から奥の総ての風景を失って了ったことになる。

実はこの記事を書いている内に、注文していた『月光仮面』第1部「どくろ仮面編」(川内康範作。脚本)のDVDが届いて、勅額門前の貴重な映像を確認することが出来た。何を場違いなと思われる方も有ろうかと思われるが、実は昭和32、33年当時の増上寺の現況を知る貴重な実写映像なのである。元々はWeb検索をする中で「酒場で歴史を語る会」のホームページ(<http://060636.blog24.fc2.com/blog-category-2.html>)に静止画像とともに紹介されているのを見て、DVDを購入してみたが、半分建ち上がった東京タワーを背に増上寺台徳院勅額門前の風景が写し出されている。「酒場で歴史を語る会」のホームページでは、第2話と第3話に映像が有ると記されているが、私の見る限り第3話に写っている宝塔や墓所の映像は増上寺の風景の中には確認できない景色なので、寛永寺のものではないかと思われる。

第2話の映像は、探偵の袋五郎八(久野四郎)が月光仮面(大瀬康一)と初めて出会う部分で、丁子門の側から勅額門の前まで袋五郎八がスクーターで乗りつけて来る部分から増上寺のシーンが始まる。袋五郎八はスクーターを止めて辺りを見回し、映像は袋探偵の目の動きを追う様に勅額門の前から惣門に向かって左側をゆっくりスパンしていくが、焼け残った経蔵の前に崩れかけた石灯籠の姿がはっきりと映し出されていく。画面は再び丁子門側に替わり丁子門から勅額門の前までをスパンしていく。この部分で東京タワーの4脚が組み上がった状態が後景に見える。映像の中で丁子門の姿は、大きく瓦の剥落した屋根とともに痛ましい姿を晒している。勅額門の中庭、水盤舎の柱は撤去された後なのか姿が見られない。

ここで袋五郎八はスクーターから降りて、勅額門の向かって左側を懐中電灯を照らしながら歩いていき一際大きな石灯籠の前で月光仮面に出会うことになる。

灯籠の上棹には「台徳院」下棹には「尊前」の文字が見えるが、残念ながら献納した大名の名前は読み取れない。

月光仮面は昭和33年2月24日に第1回が放映されるので、画面背後の東京タワーの建築の状況から見て、鈴木尚等による学術調査の行われていた時期の僅かに前の時期では無いかと思われる。

ホームページ上に静止画像が紹介されているので、一部を掲げておく。



写真 10 「酒場で歴史を語る会」 ホームページから



写真 11 同サイトから

写真 10 は袋五郎八が焼け残った大方丈や丁子門の方からスクーターで勅額門前までやってきた所。写真 11 は月光仮面と初めて出会う場面である。

失われた風景を復元していく作業には、時として見たくもない情景を目の前に突きつけられ、思わず立ち止まってしまう

という痛みも付きまとう。

時の流れの中で、掌の砂がこぼれるように自然に朽ちて失われていく物が有るのは、「あわれ」とも言えようが、時を超えた大きな力で貴重な文化財が失われていく姿を見ることは歯噛みしても及ばぬ口惜しい悲しみがある。

その意味ではかろうじて焼失を免れ、今私達の前に秀麗な姿を残してくれた「丁子門」について書いてこの稿を終わることにしたい。

戦災を奇跡のように逃れて、今狭山不動寺に保存されている「丁子門」は名前からして不思議な門である。

図 1 で確認して頂けるように、丁子門は台徳院霊廟から崇源院の霊牌所へ繋がる仕切門で、写真からも判るように台徳院側に門扉がある。つまり崇源院側に内開きに門が開かれる様になっている。

崇源院霊牌所は奥院を持たず、唐門と宝塔は別途北廟に設けられていた。この辺りの事情は稿を改めて考えてみたいと思うが、田辺泰博士は『徳川家霊廟』の中で「丁子門」の配置をも含めて次のように述べている。

「(崇源院霊牌所は)この地形から見ても最初からこの地に築かれたものではなく、台徳院霊廟の出来た後この地に再建されたものであろうと推せられる。何故ならば惣門や勅額門の類もなく、この霊牌所に入る順序は、台徳院惣門・勅額門を経て右折し、丁子門を経て中門に至るものと思われるからである。然も丁子門は単に台徳院北門と考えれば扉が外開きとなり、他にこう云ふ例を見ず、寧ろ崇源院霊牌所の門と見る方が至当である。」

ところでこの「丁子門」だが、千秋文庫所蔵の『享保年間による彩色大絵図』には単に「御門内九尺」と有るだけで特別の記述はない。撰門の『縁山志』もこの門に関しては触れていない。『東京名所図会』も多くの記事を『縁山志』に負っているの、特別の関心を示していない。一方で村上博了師の『増上寺史』には

「丁子門」の項を立て「昔から丁子門は将軍のみが専用の門であったと伝えられていた理由もまたここにあったのである。丁子門は有名な建造物の一つであって参拝者は見とれたものであった。」と記して別の知見を示している。

田辺泰博士も『徳川家霊廟』の中で「丁子門」の構造や意匠について詳述しているが、何故「丁子門」と呼ぶのかその理由を示していない。何故「丁子門」と呼ぶのか。唯一側面の貫の上に載せた臺股に「尻合わせ丁子紋」と呼ばれる紋が有ることだけが、由来を思わせる。

「丁子」はインドネシアのモルッカ諸島原産の芳香性の花で、花のつぼみの部分が香辛料として重用された。学名は *Syzygium aromaticum*、フトモモ科フトモモ属の草花だそうである。残念ながら筆者は植物には無



写真 12 『F. ベアト幕末日本写真集』より



写真 13 現在の丁子門(狭山山不動寺)



写真 14 「デジタル薬草園」から





写真 15 丁子門側面蓐股丁子紋



図 2 三つ丁子紋

知であるのでこれ以上の言及は止めにして、Web 上にあった丁子の蕾の写真を転載しておくに止めたい。ところでこの「丁子紋」は写真 15 でも見て取れる様にかかなり目立つ所に附されていてただ意匠の一つとして付けられた物とは到底考えられない。

『寛政重修諸家譜 家紋』には「丁子は、モルッカ諸島原産の香料を取る木で、平安時代に移入された。瑞祥的意義を持ち、宝づくしには文様として必ず入っており、後、紋章化した」とあるが、ここでは瑞祥的意義というよりはやはり紋章と考えるべきと思われる。私にこの「丁子紋」のことを教えてくれた小平市の田中氏も家紋の書籍を当たり色々お調べになったが、ついに関連を見出せなかったと言われた。

「丁子門」が崇源院と関連の有る人物により奉献されたという記録はない。造営の関係者の紋を入れるにすれば、葵の紋の真上、しかも貫の上に載せる蓐股の中央に堂々と飾れるのは常識的に考え憎い。だとすれば崇源院その人に密接に関わっている紋と考えるしかない。しかし残念ながら出自の浅井氏との関連も見出せなかった。

この稿を読んで興味の有る方は是非、お調べ頂けたらと思う。